第2章

大学生活の満足度によるグルーピングと学生生活や卒業後のキャリアとの関連

本章の概要

本章では、大学生活に対する満足度の回答によって回答者をグルーピングし、その群をもとに入学からキャリアまでの関連性について検討した。統計的な手法を用いたグルーピングの結果、学業と課外活動の双方に満足した群、学業・課外活動(文化系・スポーツ系)のいずれかに満足した群、学業にも課外活動にも満足できなかった群の5つに分けられた。この群をもとに他の質問に対する回答傾向の違いを検討した結果、学業または課外活動のいずれかに満足した卒業生よりも、その両方に満足した学生の方が学生生活全般の満足度が高い結果であった。どの群も入学時には学びたい学部・学科であったことに影響を受けた程度に変わりはないが、入学後に学業面や課外活動で意欲に違いが見いだされ、注力できるものとの出会いがあったかどうかによるのではないかと考えられる。意欲的になれる学業や課外活動に出会えた卒業生ほど、様々な場面での学びのスタイルを形成しており、卒業後の仕事や生活、自らが成長できることに対する満足感につながっていることが示唆された。

1. 分析の目的

卒業生調査は、本学での学びと卒業後のキャリアや生活との関係を知ることを目的としている。令和元(2019)年度は、この目的と回答者の負担軽減との両立をねらって質問紙のスリム化を行い、令和2(2020)年度も継続して同じ質問紙を用いた。

本調査の結果については、第1章の単純集計結果のみならず、年度ごとにテーマを設定して一歩踏み込んだ分析を行ってきた。令和元年度は、「あなたは、大学入学から大学卒業までに、以下の知識・能力をどのくらい身につけることができましたか。」の各項目に対する回答を用いて卒業生を4群に類型化して群による違いを検討し、学部卒業時の学修実感を起点とした分析を試みた。学修実感による群分けは、高・中・低のほか、専門的な知識の学修実感は中程度だが汎用的能力については高実感を得た群の4つであった。結果として、高い実感を得ていた卒業生は学習意欲を強く持って入学し、学び方にも自分なりの工夫をしており、卒業後5年後現在も、他の群に比べて仕事の内容や仕事を通じて成長できることに対する満足度が高かった¹。

昨年度の結果を踏まえて、今年度は、卒業生の大学に対する満足度に着目した。本調査ではQ6「あなたは、大学時代の環境や学生生活にどの程度満足していますか。」という質問において、授業や自身の学習成果、教員や友人との人間関係のほか、施設や事務室等の学生サポート、そして学生生活全般というような10項目で訊ねている。大学生活では学業が中心であるが、学生はその他にも様々なことを経験しており、各種の満足度を示すデータは、教学マネジメントを推進する上でも重要な情報源となる。本章では、この満足

¹ https://www.univ.gakushuin.ac.jp/news/2021/0330.html

度に関する回答を用いて卒業生を類型化した後、他の質問への回答傾向の群による違いについて検討する。

2. 結果

2-1. グルーピングの結果

まず、「あなたは、大学時代の環境や学生生活にどの程度満足していますか」の質問で訊ねた 10 項目の回答を用いて、クラスタ分析(k-means 法による)を行って回答者をグルーピングした。 $3\sim6$ のクラスタで分析を試行して分析の結果、5つのクラスタに分類することで、特徴が見られたと判断した。なお、回答は 1.2 全満足していない4.2 でも満足している、0.1 判断できるほど体験できなかった、の 5 件法で訊ねている。図 2-2-1 では、40 では、41 では、42 では、42 では、43 の項目別の満足度平均値(43 は計算に含まない)と経験率(44 では、45 では、46 であった」以外の回答をした割合)を示している。また、表 46 では、47 では、48 でするにつけたグループ名と満足度平均値と経験率からみられる特徴についてまとめた。

4.スポーツ系満足 5.全体不満足 1.全体満足 2.学業系満足 3.文化系満足 100.0% 2.743.02 3.51 1. 大学の授業の内容・水準 94.4% 2. 自分自身の学習成果 2.31 3.33 2.60 3.04 3.22 2.25 2.66 3.44 77.8% 3. 教員との人間関係 2.60 83.39 4. 友人との人間関係 3.51 5. 課外活動(部・サークル活 1.85 2.61 3.29 55.6% € **6**5.5% 動等を含む) 3.60 98.1% 6. 教室や図書館・自習室等の 3.65 学習環境 8.8% 7. グラウンドや体育館等のス ポーツ施設 1.40 2.31 3.00 100.0% 1.90 3.40 8. 食堂や大学売店等の商業サ 1.95 3.05 58.39 ービス 2.50 3.21 9. 事務室や教務課・キャリア **4**71 59.6% 42.20 47.2% センター等の学生サポート 3.07 89.6% 10. 大学生活全般 2.48 3.24 3.35 3.83 100.0% 1.5 2.0 2.5 3.0 3.5 0% 20% 40% 60% 80% 100% 平均値(Oは計算に含まない) 経験率

図 2-2-1 クラスタ別の満足度平均値と経験率

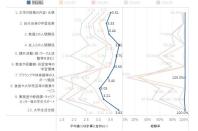
グループ名と満足度の傾向

【クラスタ1:全体満足群(100名、28.2%)】

全ての項目について経験しており、かつ満足度の高い卒 業生。全般的な満足度は他の4群よりも高い。学業面、 課外活動、施設や事務室など、大学で様々なことを経験 して満足を得られたことが見受けられる。

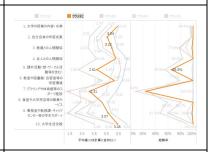
2. 自分自身の学習成果

縮小版のハイライト図



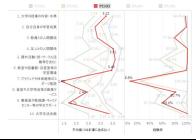
【クラスタ2:学業系満足群(55 名、15.5%)】

課外活動の経験率は65%程度であり、比較的満足度も低 い。スポーツ施設の利用経験も低く、満足度も低いが、 授業・学習成果・教員との人間関係など、主として学業 面に対して満足度が高く、学業面に注力していたことが 想定される卒業生。



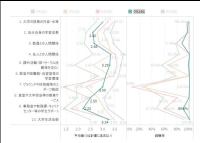
【クラスタ3:文化系満足群(57名、16.1%)】

課外活動の経験率が100%であるが、スポーツ施設の利 用経験がほとんどなく、文化系の課外活動を行っていた と想定される卒業生。学業面の満足度、教員や事務等と の接触経験や満足度がやや低い。



【クラスタ4:スポーツ系満足群(106 名、29.9%)】

ほぼ全員が課外活動と学内のスポーツ施設を経験して おり、スポーツ系の課外活動を行っていたと想定される 卒業生。スポーツ施設の満足度以外は文化系満足群と大 きな違いがなく、学業面、教員や事務等への満足度がや や低い。



【クラスタ5:全体不満足群(36 名、10.2%)】

全体的に満足度が低い傾向があり、教員だけではなく友 人との人間関係も結ぶことができなかった卒業生が含 まれるグループ。教室・スポーツ施設・商業サービス・ 事務室等も利用経験が少なく、満足度も低い傾向にあ

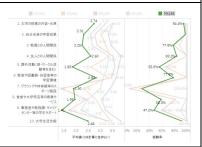


表 2-2-1 の通り、満足度の平均値と経験率のパターンから、「全体満足群」、「学業系満足 群 |、「文化系満足群 |、「スポーツ系満足群 |、「全体不満足群 | の5つのグループに分けられ た。10.「大学生活全般」に対する回答の平均値は、「全体満足群>学業系・文化系・スポー

ツ系満足群>全体不満足群」という関係になっており、全体満足群は学業面と課外活動等の全てを経験し、かつ高い満足を得ている。学業系満足群・文化系満足群・スポーツ系満足群は、それぞれ注力した活動に関する満足度は高いが、注力しなかった活動については満足度や経験率が低い。全体不満足群は、多くの項目において一定数経験しなかったと回答する卒業生が含まれ、経験したとしても満足度は低く、特に大学生活全般の満足度は他の4群に比較してとても低い結果であった。

2-2. グループによる入学への影響と志望度の違い

ここからは、2-1 で作成したグループを用いて、入学から卒業、卒業後5年経過後の現在 について、5つの群の回答傾向の違いを検討していく。

Q1「入学にあたって、以下の項目にどのくらい影響を受けましたか」では、入学にあたって受けた影響について 9 項目に分け、 4.とても影響があった~ 1.全く影響がなかったの 4件法で訊ねている。これら 9 項目で、群によって回答傾向に違いがみられるかを検討した。

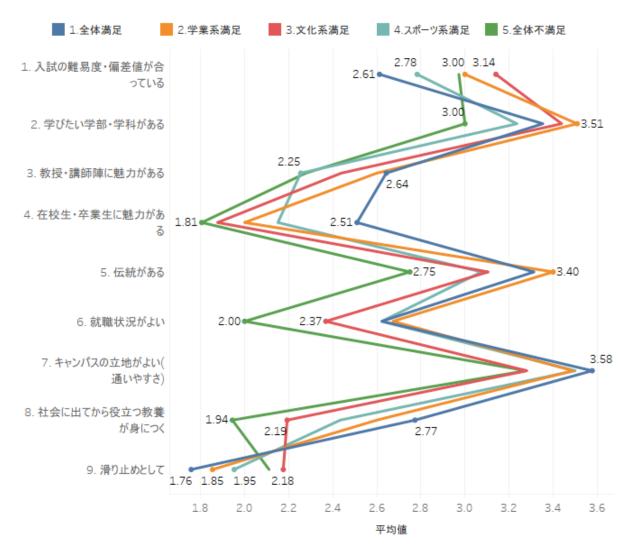


図 2-2-2 クラスタ別の入学への影響度平均値

図 2-2-2 では、Q1 へのグループ別の回答平均値をグラフ化したものである。グループを要因とした分散分析の結果、いずれのグループ間にも差が見られなかったのは、1. 「入試の難易度・偏差値が合っている」、2. 「学びたい学部・学科がある」、3. 「教授・講師陣に魅力

がある」、7.「キャンパスの立地がよい(通いやすさ)」、9.「滑り止めとして」であった。平均値を見ると、学びたいと思ったことや、キャンパス立地の良さに影響を受けていたが、滑り止めとして考えていた程度はどのグループもあまり高くないことがわかる。

差が見られた項目を見ていくと、まず 4. 「在校生・卒業生に魅力がある」では、全体満足群の平均値が、全体不満足群と文化系満足群よりも高い結果であった。全体満足群には、良いモデルとなる在校生や卒業生を入学前から知っていた割合が比較的高い可能性が考えられる。5. 「伝統がある」では、平均値トップの学業系満足群と全体不満足群の間で差が見られた。したがって、学業に特に満足した卒業生は、入学時に伝統を特に重んじていた傾向にあることがうかがえる。6. 「就職状況がよい」では、全体満足群・スポーツ系満足群・学業系満足群の各群が全体不満足群よりも平均値が高い結果であった。全体不満足群は就職動向をあまり気にせず入学してきたようである。8. 「社会に出てから役立つ教養が身につく」では、全体満足群のほうが全体不満足群・文化系満足群より平均値が高く、学業系満足群のほうが全体不満足群・文化系満足群より平均値が高く、学業系満足群のほうが全体不満足群よりも平均値が高い結果であった。全体不満足群と文化系満足群は、教養についてあまり期待せず入学したグループであることがうかがえる。

また、図 2-2-3 には、Q 2 「出願時の学習院大学の志望度はどれくらいでしたか」に対する回答分布を示したものだが、いずれの群にも 50%以上の第一志望だった卒業生が含まれており、志望度の偏りは見られなかった。

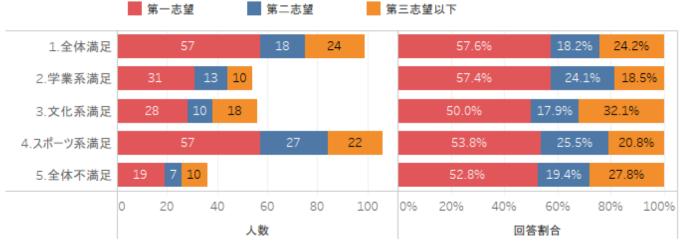


図 2-2-3 クラスタ別の入学への影響度平均値

グループ別にまとめてみると、まず、全体満足群はモデルとなる在校生や卒業生を知っている人もおり、就職動向や身につく教養への期待に影響を受けて入学してきたようである。 学業系満足群は、就職動向や教養への期待の他に、伝統も重んじる傾向がある。文化系満足群は、入学への影響は総じて平均的だが、教養が身につくかという期待はあまり持たずに入学した。スポーツ系満足群は、就職動向に影響を受けていたが、その他の影響は平均的である。全体不満足群は、在校生や卒業生の魅力、伝統、就職状況、身につく教養といった点であまり影響を受けていなかったようである。

2-3.グループによる各種活動への取り組む意欲の違い

Q3「あなたは、大学の授業やその他の学習などにどのくらい意欲的に取り組みましたか。」では、授業や各種活動 14 項目に関する取り組む意欲を 4.とても意欲的だった~1.全く意欲的ではなかった、0.経験しなかった の5件法で訊ねている。これらの 14 項目について、グループ間の違いについて検討する。

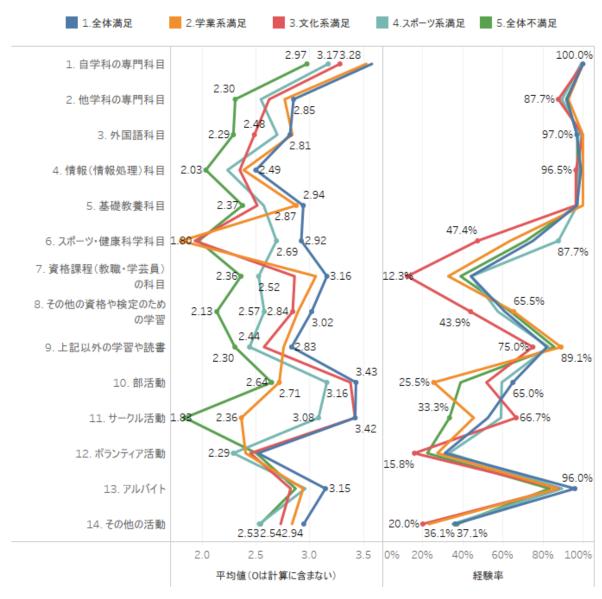


図 2-2-4 クラスタ別の入学への影響度平均値

図 2-2-4 では、平均値(0 は計算から除外)とグループ別の経験率をグラフ化したものである。いずれのグループ間にも差が見られなかった項目は、4.「情報(情報処理)科目」、7.「資格課程(教職・学芸員)の科目」、10.「部活動」、12.「ボランティア活動」、13.「アル

バイト」、14.「その他の活動」であった。

差が見られた項目を見ていくと、まず、1. 「自学科の専門科目」では、全体満足群・学業系満足群は、スポーツ系満足群・全体不満足群よりも平均値が高い結果であった。2. 「他学科の専門科目」、3. 「外国語科目」、8. 「その他の資格や検定のための学習」では、全体満足群は全体不満足群よりも平均値が高い結果であったが、その他のグループ間には差は見いだされなかった。11. 「サークル活動」では、全体満足群・文化系満足群・スポーツ系満足群の平均値が、学業系満足群・全体不満足群よりも高い結果であった。

経験率について、全体的な傾向に比べて経験の有無に偏りがあるかを検討した結果、まず6.「スポーツ・健康科学科目」でスポーツ系満足群は経験率が高く、文化系満足群は経験率が低かった。7.「資格課程(教職・学芸員)の科目」では文化系満足群の経験率が低く、10.「部活動」では、全体満足群の経験率が高く、学業系満足の経験率が低いという結果であった。さらに、項目9・10の回答を合わせて、部・サークル活動について、両方あるいはどちらかを経験したか、両方とも経験しなかったかをグループ別に集計したところ、図2-2-5のようになり、学業系満足群と全体不満足群にそれぞれ40%程度どちらの経験もない卒業生が存在するが、他の3グループの卒業生のほとんどは少なくともどちらかの経験があることがわかった。

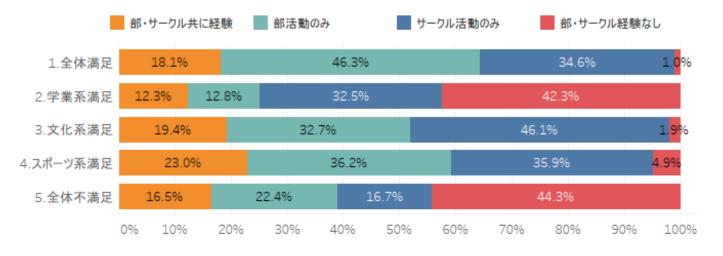


図 2-2-5 グループ別の部・サークル活動の経験

以上の結果をグループ別に見ると、全体満足群は、専門科目や語学、資格等の学習面でも比較的高い意欲を示しており、サークル活動を経験した卒業生は意欲を高くもって取り組んでいたこと、部活動の経験率が高いことがわかった。学業系満足群は、専門の科目に意欲的に取り組んでいたが、サークル活動は経験していても意欲は高くなく、また部・サークル活動を経験しなかった卒業生もある程度含まれている。文化系満足群は、授業科目等への意欲は平均的で、サークル活動には高い意欲をもって取り組んでいたことがうかがえる。スポーツ系満足群は、専門の科目に対する意欲が少し低いが、サークル活動には高い意欲で取り

組んでいた。全体不満足群は、専門科目や外国語科目、その他の資格等のための学習、さらにサークル活動も意欲的ではなく、部・サークル活動を経験しない卒業生が一定数含まれている。

2-4. グループによる学び方の違い

Q4「あなたは、大学在学中、どのような学び方をしましたか。」では、大学での学び方に関する10項目について、4.とてもあてはまる~1.全くあてはまらないの4件法で訊ねている。これらの10項目について、グループ間の違いを検討する。

図 2-2-6 クラスタ別の学び方に関する回答の平均値

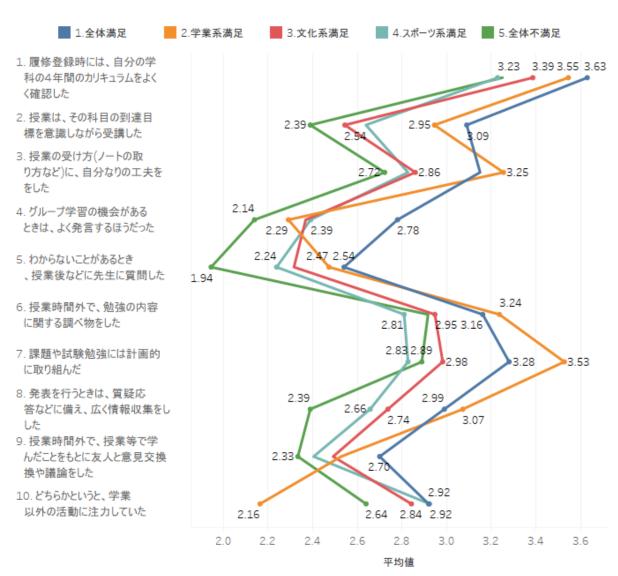


図 2-2-6 では、大学での学び方におけるグループ別の平均値についてグラフ化した。 いずれのグループ間にも違いが見られなかったのは、9.「授業時間外で、授業等で学んだ ことをもとに友人と意見交換や議論をした」のみであった。

差が見られた項目を見ていくと、1.「履修登録時には、自分の学科の4年間のカリキュラムをよく確認した」では、全体満足群の平均値がスポーツ系満足群・全体不満足群よりも高かった。2. 「授業は、その科目の到達目標を意識しながら受講した」では、全体満足群の平均値が、文化系満足群・スポーツ系満足群・全体不満足群よりも高かった。3. 「授業の

受け方(ノートの取り方など)に、自分なりの工夫をした」では、学業系満足群の平均値が文化系満足群・スポーツ系満足群・全体不満足群よりも高かった。4.「グループ学習の機会があるときは、よく発言するほうだった」では、全体満足群の平均値が他の4グループよりも高かった。5.「わからないことがあるとき、授業後などに先生に質問した」では、全体満足群の平均値が全体不満足群よりも高かった。6.「授業時間外で、勉強の内容に関する調べ物をした」では、学業系満足群の平均値がスポーツ系満足群よりも高かった。7.「課題や試験勉強には計画的に取り組んだ」では、全体満足群・学業系満足群の平均値がスポーツ系満足群・全体不満足群よりも高かった。10.「どちらかというと、学業以外の活動に注力していた」では、全体満足群・文化系満足群・スポーツ系満足群の平均値が学業系満足群よりも高かった。

以上の結果をグループ別に見ていくと、全体満足群は、4年間のカリキュラムをよく確認し、科目の到達目標を意識しながら受講しており、グループ学習の際の発言や教員への質問をよく行うなど、他者との関わるような内容の意識が比較的高かったようである。また、課題や試験などへは計画的に取り組んでいたが、学業以外の活動へ注力していたという自覚が強い。学業系満足群は、授業の受け方を工夫したり、授業時間外での調べ物をしたりするなど、インプットの方法を意識的に実行しており、課題や試験などへの計画性をもって学び、あまり学業以外に注力はしていなかったことがうかがえる。文化系満足群は、科目の到達目標の意識は比較的低く、学業以外の活動へ注力していた傾向が強いが、その他の学び方は平均的に行っていたようである。スポーツ系満足群は、カリキュラムに対する意識が比較的低く、授業時間外の調べ物もあまりしていなかったようであり、学業以外の活動に注力していた傾向がうかがえる。

2-5.グループによる学修実感の違い

O5「あなたは、大学入学から大学卒業までに、以下の知識・能力をどのくらい身につけ ることができましたか。」では、大学で身についたと感じる知識・能力に関する17項目につ いて、5.しっかり身についた~1.全く身につかなかった の5件法で訊ねている。これらの 17項目について、グループ間の違いを検討する。

1.全体満足 2.学業系満足 3.文化系満足 4.スポーツ系満足 5.全体不満足 3.19 3.65 3.67 A. 学科の専門分野の知識 4.10 2.78 B. 学科の専門分野以外の幅広 い知識 3.15 3.40 3.58 2.74 2.22 C. 将来の職業に関連する知識 2.85 や技能 3.41 2.18 D. 外国語の運用能力 2.69 2.82 2.98 2.51 3.02 3 19 E. 異文化や異文化圏の人々に 2.90 関する知識・理解 2.36 3.95 F. 目標を立てて計画的に行動 3.39 する力 2.64 3.28 3.76 3.09 3.56 G. 自分の考えを他者に文章で 3.37 3.71 3.95 伝える力 H. 自分の考えを他者に口頭で 3.08 伝える力 3.42 3.58 3.93 3.65 1.見かけや周囲にとらわれず批 3.49 判的に考える力 3.17 4.07 」. 情報を収集し、整理するカ 3.39 3.54 3.844.04 3.45 K. 現状を分析し、課題を明ら 4.03 かにする力 3.19 3.54 3.87 3.18 L. 発見した課題の解決策を提 43.373.67 3.000 3.98 示する力 4 32 M. 他者の話をしっかり聴く力 3.72 **3**.75 4.16 3.91 2.92 3.83 N. 他者と協力してものごとを 進める力 3.96 4.29 O. 目標に向かって集団や組織 2.57 € 3.56 4.04 3.24 を動かす力 3.60 2.97 3.25 3.65 P. 自分の適性や能力を把握す 4.07 るカ 3.46 3.0 Q. 広い視野から人間を探究す る力 3.13 3.42 3.67 4.08 2.5 3.0 3.5 4.0

図 2-2-7 クラスタ別の知識・能力の学修実感に関する回答の平均値

平均値

表 2-2-2 項目別の平均値の差が検出されたグループの組み合わせ

| 項目内容 | 分析結果 | | |
|-------------------------|-------|---|---------|
| A. 学科の専門分野の知識 | 不・ス | < | 全 |
| | 不 | < | 学 |
| B. 学科の専門分野以外の幅広い知識 | 不・ス・文 | < | 全 |
| C. 将来の職業に関連する知識や技能 | 不・ス・文 | < | 全 |
| | 不 | < | 学 |
| D. 外国語の運用能力 | 不・文 | < | 全 |
| E. 異文化や異文化圏の人々に関する知識・理解 | 不 | < | 全 |
| F. 目標を立てて計画的に行動する力 | 不・ス・文 | < | 全 |
| | 不・ス | < | 学 |
| G. 自分の考えを他者に文章で伝える力 | 不・ス | < | 全 |
| H. 自分の考えを他者に口頭で伝える力 | 不・ス | < | 全 |
| I.見かけや周囲にとらわれず批判的に考える力 | 不・ス | < | 全 |
| J. 情報を収集し、整理する力 | 不・ス | < | 学・全 |
| K. 現状を分析し、課題を明らかにする力 | 不・ス | < | 全 |
| L. 発見した課題の解決策を提示する力 | 不・ス・文 | < | 全 |
| M. 他者の話をしっかり聴く力 | 不・ス | < | 全 |
| N. 他者と協力してものごとを進める力 | ス | < | 全 |
| | 不 | < | ス・文・学・全 |
| O. 目標に向かって集団や組織を動かす力 | 学 | < | 全 |
| | 不 | < | ス・文・全 |
| P. 自分の適性や能力を把握する力 | 不・ス・文 | < | 全 |
| Q. 広い視野から人間を探究する力 | 不・ス・文 | < | 全 |

※ 全:全体満足群、学:学業系満足群、文:文化系満足群

ス:スポーツ系満足群、不:全体不満足群

図 2-2-7 では、グループ別の平均値についてグラフ化した。分析の結果、全ての項目でグループ間の違いが検出された。また、項目別に、どのグループ間の差が検出されたかについて、表 2-2-2 にまとめた。

A.「学科の専門分野の知識」では、全体満足群・学業系満足群の平均値が全体不満足群よりも高かった。B.「学科の専門分野以外の幅広い知識」では、全体満足群の平均値が文化系満足群・スポーツ系満足群・全体不満足群よりも高かった。C.「将来の職業に関連する知識や技能」では、全体満足群の平均値が、文化系満足群・スポーツ系満足群・全体不満足群よりも高かったことに加え、学業系満足群の平均値が全体不満足群よりも高いことも検出された。D.「外国語の運用能力」では、全体満足群の平均値が、文化系満足群・全体不満足群よりも高かった。E.「異文化や異文化圏の人々に関する知識・理解」では、全体満足群の平均値が全体不満足群よりも高い結果であった。このように、全体満足群や学業系満足群が他

のグループに比較して高い学修実感をえていることがうかがえるが、これらは大学の授業などに意欲的に取り組んだグループであり、このことが知識系の高い学修実感となって現れていることがうかがえる。

次に F. 「目標を立てて計画的に行動する力」では、全体満足群の平均値が文化系満足群・スポーツ系満足群・全体不満足群よりも高く、学業系満足群の平均値がスポーツ系満足群・全体不満足群よりも高い結果であった。G. 「自分の考えを他者に文章で伝える力」、H. 「自分の考えを他者に口頭で伝える力」、I. 「見かけや周囲にとらわれず批判的に考える力」、J. 「情報を収集し、整理する力」、K. 「現状を分析し、課題を明らかにする力」では共通して、全体満足群の平均値がスポーツ系満足群・全体不満足群よりも高かった。J では学業系満足群の平均値がスポーツ系満足群・全体不満足群よりも高いという結果も検出された。L. 「発見した課題の解決策を提示する力」では、全体満足群の平均値が文化系満足群・スポーツ系満足群・全体不満足群よりも高い結果であった。このように、計画的に行動する力や伝達力、情報収集能力や課題の分析や解決策を提示する力では、全体満足群の学修実感が高く、スポーツ系満足群や全体不満足群はあまり実感できていない。学業にも課外活動にも積極的に取り組んだ相乗効果として、全体満足群のこれらの能力の実感につながっていることが考えられる。

M.「他者の話をしっかり聴く力」では、全体満足群の平均値がスポーツ系満足群・全体不満足群よりも高かった。N.「他者と協力してものごとを進める力」では、全体満足群の平均値がスポーツ系満足群よりも高いという結果に加えて、全体満足群・学業系満足群・文化系満足群・スポーツ系満足群の平均値が全体不満足群よりも高いという結果も検出された。O.「目標に向かって集団や組織を動かす力」では、全体満足群の平均値が学業系満足群よりも高い結果に加えて、全体満足群・文化系満足群・スポーツ系満足群の平均値が全体不満足群よりも高いという結果も検出された。P.「自分の適性や能力を把握する力」と Q.「広い視野から人間を探究する力」では、全体満足群の平均値が、文化系満足群・スポーツ系満足群・全体不満足群よりも高いという結果であった。これらの対人関係に関する能力についても、学業と課外活動の両方に意欲的であった全体満足群の学修実感が高いことが確認された。

このように全体満足群は、知識・能力に関する全ての項目で、比較的高い学修実感がえられていた。また、学業系満足群も、専門分野の知識や目標に対する計画的な行動力、情報収集力など一部の能力について学修実感が高い結果であったが、集団や組織を動かす力についてはあまり実感が得られておらず、課外活動へ参加していなかったためか、組織的な活動を在学中にあまり経験していなかったことがうかがえる。スポーツ系満足群は多くの項目で、また、文化系満足群は一部の項目で学修実感が低く、まず学業に意欲をもって取り組むことで知識や能力の学修実感が得られ、それに加えて課外活動等に取り組むことによって組織的な取り組みに関する能力の学修実感が得られる、ということが確認されたと言える。そして、その両方に意欲的に取り組めなかった全体不満足群の学修実感の低さが確認された。このグループは総じて学修実感を得られていないが、他者と協力してものごとを進め

る力や集団や組織を動かす力の実感が非常に低い。全体不満足群は、学業にも課外活動等にもあまり積極的ではないグループなため、どちらの場面でもあまり他者と関わりを持てていなかったのではないだろうか。以上の結果は、大学において自分が選んだ学問領域を独力で学んでいくことも重要であるが、周囲の人間とのコミュニケーションや何かの組織に所属して組織的な活動に関わることも同じように重要であることの証拠となっている。

2-6. グループによる卒業直後の仕事内容の違い

Q10「あなたの大学卒業直後の仕事はどのような内容でしたか。」では、卒業直後に就いた仕事の内容について、4.とてもあてはまる~1.全くあてはまらない の4件法で訊ねている。

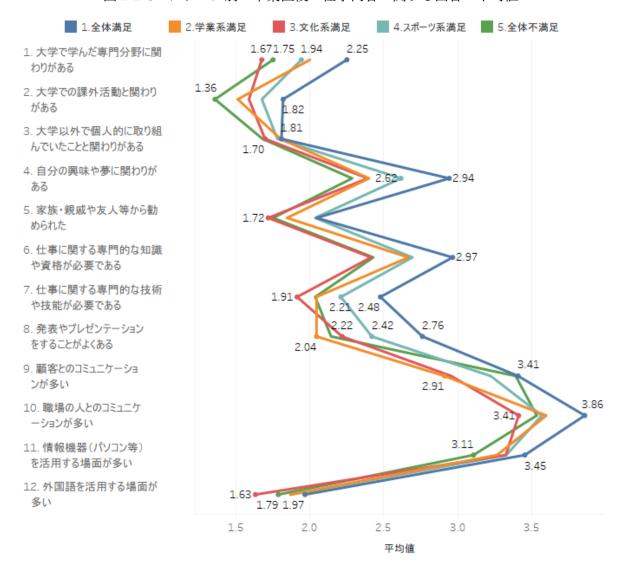


図 2-2-8 クラスタ別の卒業直後の仕事内容に関する回答の平均値

図 2-2-8 では、グループ別の平均値についてグラフ化した。分析の結果、8.「発表やプレゼンテーションをすることがよくある」と 10.「職場の人とのコミュニケーションが多い」でのみグループ間の差が検出された。

項目8では、全体満足群の平均値が学業系満足群よりも高く、項目10では全体満足群の 平均値が文化系満足群・スポーツ系満足群よりも高いという結果であった。全体満足群は、 発表などをする機会が多く、職場内でのコミュニケーションも特に多い職に就いていたが、 その他には違いは特に見られず、卒業直後の仕事の内容に大きな違いはないと言えるだろう。

次に、Q11「あなたの大学卒業直後から現在までの就業状況として、最もあてはまるものを1つ選んでください。」では卒業直後に就職したと回答した卒業生に対して、卒業直後からの現在までの就業状況について尋ねている。

図 2-2-9 クラスタ別の卒業後 5年間の就業状況の回答

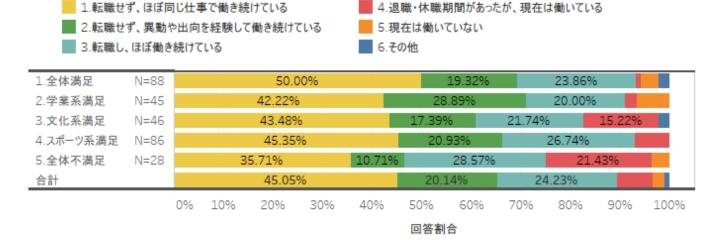


図 2-2-9 は、この質問に対する回答の割合を示したものである。この回答を、転職をせず働き続けた卒業生(「1.転職せず、ほぼ同じ仕事で働き続けている」または「2.転職せず、異動や出向を経験して働き続けている」と回答)、転職を経験した卒業生(「3.転職し、ほぼ働き続けている」と回答)、その他の卒業生で、グループ別に人数の偏りがあるかを検討したところ、偏りはほとんど見られなかった。したがって、どのグループも同程度に転職を経験した卒業生が含まれていることが確認された。

2-7. グループによる卒業後5年後現在の仕事内容の違い

Q12「あなたの現在の仕事はどのような内容ですか。」では、転職を経験した卒業生にのみ、転職後の仕事の内容について Q10 と同じ内容で尋ねている。ここでは、転職を経験した卒業生は Q12 の回答を、転職を経験していない卒業生は Q10 の回答を用いて、全て現在の職業に関する回答に調整したうえで、グループ間の違いを検討する。

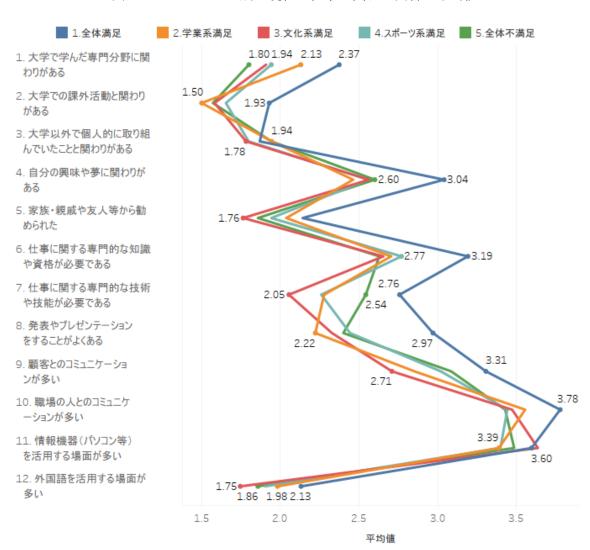


図 2-2-10 クラスタ別の現在の仕事に関する回答の平均値

図 2-2-10 では、グループ別の平均値についてグラフ化した。分析の結果、グループ間の差が見られた項目は、4 つあり、卒業直後の状況よりも 2 項目増加した。具体的には、4.「自分の興味や夢に関わりがある」と 10.「職場の人とのコミュニケーションが多い」で全体満足群の平均値がスポーツ系満足群よりも高い結果であった。7.「仕事に関する専門的な技術や技能が必要である」で全体満足群の平均値が文化系満足群よりも高かった。8.「発表やプレゼンテーションをすることがよくある」では、全体満足群の平均値が他 4 グループよりも

高い結果であった。このように、卒業直後に既に差の見られた項目8・10に加え、項目4・7でも差が見られるようになった。項目4や7では、全体満足群は卒業直後から現在の仕事で平均値が少し向上しているが、スポーツ系満足群や文化系満足群ではそれほど変化がないために、差が見られるようになった。全体満足群の転職した卒業生は、興味や夢に関わりがあり、仕事に関する専門的な技術を要する仕事に就いた傾向にあることがうかがえる。

2-8. グループによる現在の仕事に対する満足度の違い

Q13「あなたは、現在の仕事についてどの程度満足していますか。」では、卒業後5年が経過した現時点の仕事に対する満足度について、4.とても満足している~1.全く満足していないの4件法で訊ねている。

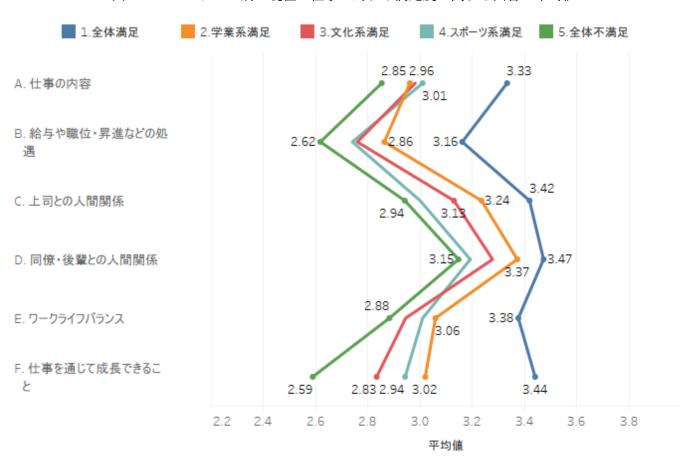


図 2-2-11 クラスタ別の現在の仕事に対する満足度に関する回答の平均値

図 2-2-11 では、グループ別の平均値についてグラフ化した。分析の結果、グループ間の差が見られた項目は、B.「給与や職位・昇進などの処遇」、C.「上司との人間関係」、F.「仕事を通じて成長できること」の3項目であった。項目 B では、全体満足群の平均値が文化系満足群・スポーツ系満足群・全体不満足群よりも高かった。項目 C では、全体満足群の平均値が、スポーツ系満足群・全体不満足群よりも高く、項目 F では、全体満足群の平均値が他4 グループよりも高いという結果であった。

このように、全体満足群は給与や処遇、上司との人間関係、仕事を通じて成長できること について他のグループよりも満足度が高い傾向にある。特に、仕事を通じた成長については、 特に満足していると言え、大学を卒業し社会人になっても、仕事を通じて学んでいる様子が うかがえる。

2-9. グループによる卒業後5年間で向上したと感じる知識・能力に関する実感の違い

Q14「大学卒業から現在までに、以下の知識・能力のうちで特に向上したと感じるものはありますか。」では、Q5で訊ねたものと同じ知識・能力に関する17項目について、複数回答を可として尋ねている。

図 2-2-12 クラスタ別の卒業後5年間で向上したと感じる能力の選択割合



図 2-2-12 は、全体の選択率(総計)が多かった順に、各グループと全体の選択割合のグラ

フと割合を示したものである。この中で、選択割合でグループ間の違いが見られたものは、 5つであった。

選択割合でグループ間の違いが見られた項目は、まず C. 「職業に関連する知識や技能」であり、全体満足群の選択割合が高く、全体不満足群の選択割合が低かった。次に、A.「専門分野の知識」、F.「目標を立てて計画的に行動する力」では、全体満足群の選択割合が高かった。O.「目標に向かって集団や組織を動かす力」、P.「自分の適性や能力を把握する力」では、全体満足群の選択割合が低かった。

項目 C・A・F は全体の選択率が 50%を超えていて、17 項目の中では比較的向上した実感が得られやすい中で、全体満足群が感じる割合はさらに高く、職業に関する知識や専門分野の知識、目標に対する計画性など、仕事の中で学んでいることがうかがえる。全体不満足群は比較的職業に関する知識の向上実感を得ている割合が低く、全体満足群とは反対に、仕事の中で学べていない可能性が考えられる。

項目 O や P は全体的に見ると向上実感を得ている割合は低めだが、全体満足群は比較的向上したと実感している率が高い。これらの項目の能力は、組織の中で他者と関わりながら高まっていくものであると思われるため、職場の人とのコミュニケーションが特に多いと感じている全体満足群が向上実感を得ていることは頷ける。反対に学業系満足群はこれらの向上実感があまりない。この点についての検討には慎重を要するが、学業系満足群は課外活動への参加率が低く、組織的な活動、特に組織を動かすようなことを比較的経験してきていないことが要因のうちの一つになっているのかもしれない。

2-10. グループによる卒業後5年間で向上していないと感じる知識・能力に関する実感の違い

Q15「大学卒業から現在までに、以下の知識・能力のうちであまり向上していないものはありますか。」では、Q5で訊ねたものと同じ知識・能力に関する17項目について、複数回答を可として尋ねている。

図 2-2-13 クラスタ別の学び方に関する回答の平均値

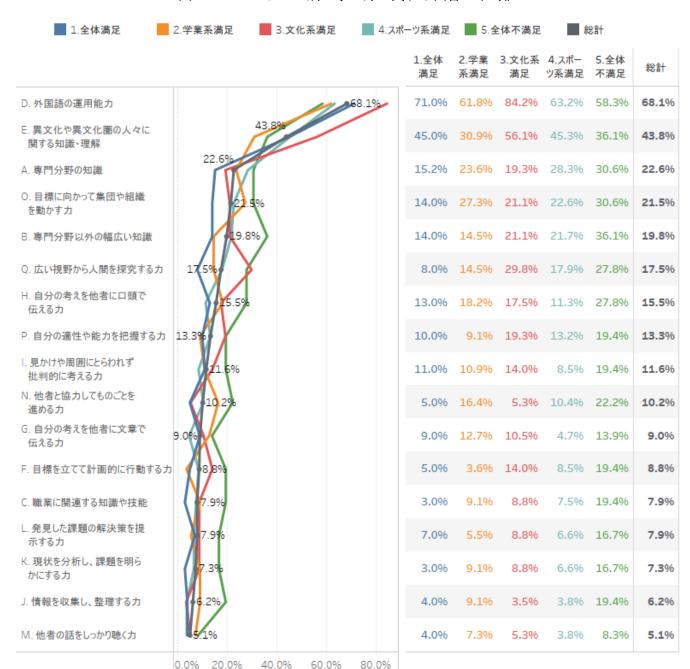


図 2-2-13 は、全体の選択率が多かった順(総計)に、各グループと全体の選択割合のグラフと割合を示したものである。この中で、選択割合でグループ間の違いが見られたものは、

6つであった。

まず D.「外国語の運用能力」で、文化系満足群の選択割合が高かった。Q.「広い視野から人間を探究する力」では、文化系満足群の選択割合が高く、全体満足群の選択割合が低かった。F.「目標を立てて計画的に行動する力」と J.「情報を収集し、整理する力」では、共通して全体不満足群の選択割合が高かった。N. 「他者と協力してものごとを進める力」と C. 「職業に関連する知識や技能」では、共通して全体不満足群の選択割合が高く、全体満足群の選択割合が低かった。

例年に引き続き、外国語の運用能力は選択割合がとても高いが、文化系満足群がより高い割合になっている点については、このグループは外国語の運用能力の学修実感が低く、仕事での外国語の活用度合いの平均値も僅差ではあるが最も低いことを鑑みると、卒業後5年の間で外国語の使用頻度が最も少ないグループである可能性が考えられる。全体満足群は、仕事での外国語活用度合いが若干高いことが、ここでの選択率の低さにつながっているのかもしれない。F・J・N・Cについて、全体不満足群の選択割合が比較的高いことに関して、これらの項目は、組織の中で目標に向かって仕事を進めていく中で身につくものであると思われるが、このグループはその経験の中でも学習している実感を得られていないことがわかる。全体不満足群は、仕事を通じた成長についての満足度も低いため、仕事の経験を自らの能力向上につなげられていない可能性が考えられる。

3. まとめ

本章の分析結果をまとめていく。まず、本章においては、大学生活の満足度に注目して満足度の6項目の回答内容を使い、統計的手法によって卒業生をグループ化した。それぞれのグループの満足度の傾向から、全体満足群、学業系満足群、文化系満足群、スポーツ系満足群、全体不満足群とした。

入学時に影響を受けた内容や志望度について、

- ・全体として学びたいと思ったことやキャンパスの立地に影響を受けていた。
- ・全体満足群は、在校生・卒業生の魅力や教養が身につくことに影響を受けていた。
- ・学業系満足群は、大学の伝統と教養が身につくことに影響を受けていた。
- ・文化系満足群は、教養が身につくことにはあまり影響を受けていなかった。
- ・全体不満足群は、就職状況の良さや教養が身につくことにあまり影響を受けていなかった。
- ・志望度はどのグループにも偏りなく、50%程度が第一志望であった。

大学時代の各種活動への取組意欲について、

- ・全体満足群は、専門科目や語学、資格等の学習面、サークル活動の意欲が高かった。
- ・学業系満足群は、専門科目の意欲は高いがサークル活動の意欲は経験していても低く、 部・サークル活動の経験がない卒業生が約4割存在した。
- ・文化系満足群は、学業面に対する意欲は平均的で、サークル活動の意欲が高かった。
- ・スポーツ系満足群は、専門科目の意欲が低く、サークル活動の意欲が高かった。
- ・全体不満足群は、専門科目や外国語科目などの学習面、サークル活動の意欲も低く、部・ サークル活動の経験がない卒業生が約4割存在した。

大学時代の学び方について、

- ・全体満足群は、カリキュラムや科目の到達目標を意識し、グループ学習での発言や教員 への質問などをよく行って、計画的に取り組んでいたが、課外活動等へ注力していた自 覚も高い。
- ・学業系満足群は、授業の受け方の工夫や授業外での調べものなどをよくしており、課題 等に計画的に取り組んでいた。
- ・文化系満足群は、科目の到達目標はあまり意識しておらず、学業以外への活動へ注力していた傾向があった。
- ・スポーツ系満足群は、カリキュラムに対する意識が低く、授業時間外の調べ物をあまり しておらず、学業以外の活動に注力していた。
- ・全体不満足群は、到達目標の意識や授業後の教員への質問、課題等への計画性などの点であまり自覚的に行っていなかった。

大学卒業までに身につけた能力の実感について、

- ・全体満足群は、全ての項目で高い実感を得ていた。
- ・学業系満足群は、専門分野の知識や目標に対する計画的な行動力、情報収集力などの実 感は高かったが、組織を動かす力については実感が低かった。
- ・文化系満足群は、専門分野以外の知識や外国語の能力、目標に対する計画的な行動力や 課題解決の提案力等で実感が低かった。
- ・スポーツ系満足群は、異文化理解以外の多くの項目で実感が低かったが、他者との協力 や集団や組織を動かす力の実感は得ていた。
- ・全体不満足群は、全ての項目で実感が低かった。

卒業直後の仕事について、

- ・全体満足群は、発表やプレゼンテーションをよく行い、職場の人とのコミュニケーションが多い仕事に就いていた。
- ・学業系満足群は、発表やプレゼンテーションをあまり行わない仕事についていた。
- ・文化系満足群やスポーツ系満足群は職場の人とのコミュニケーションが比較的少ない 仕事に就いていた。

卒業後5年後現在の仕事について、卒業直後の仕事と比べると

・全体満足群の仕事が、自分の興味や夢に関わるものになっており、専門的な技術や技能 を要する程度が高まっていた。

卒業後5年後現在の仕事に対する満足度について、

・全体満足群は給与や処遇、上位との人間関係、仕事を通じて成長できることについて、 他のグループより高く満足していた。

卒業後5年間での知識や能力の変化について、

- ・全体満足群は、仕事に関する知識・技能や、目標に対して行動する力や組織を動かす力 が向上したと感じる割合が高かった。
- ・学業系満足群は、組織を動かす力や自分の適性を把握する力についてあまり向上したと は捉えていなかった。
- ・全体不満足群は、目標に対して行動する力や情報収集力、他者との協力仕事に関する知識・技能などを向上した実感を得られていなかった。
- ・外国語の運用能力は、向上していないと回答する割合が高かった。

今回の分析からは、過去の卒業生調査の分析で抽出されてこなかった大学生活の中で主

として学業に注力した卒業生が抽出され、その満足度は課外活動に注力した卒業生と同程度であることがわかった。 学業へ注力した卒業生も、課外活動へ注力した卒業生と同程度に学生生活に満足していると言える。もちろん、満足度が最も高かった卒業生は学業も課外活動等にも意欲的だったことは分析結果からも明らかであるが、学業に注力した経験も十分に価値をもっていることが示されたと言える。

文化系またはスポーツ系の課外活動に注力して満足していた卒業生は、学び方の工夫や授業科目に対する意欲の点であまり積極的な印象は受けない。しかし、入学時点では学びたい学部・学科であることはわかるため、実際に授業を受けた段階で多かれ少なかれ期待とのミスマッチが起こったために意欲が高まらなかったのではないかと推察される。そのような中で自分に合う課外活動に携わることができたため、そちらに注力してある程度満足して卒業できた、という学生像が浮かび上がる。現在の仕事に対する満足感も、学業と課外活動両方に満足していた卒業生と比べると低い。

学業に注力した卒業生は自分に合う課外活動に出会えず、課外活動に注力した卒業生は自分の興味を満たせる学問に出会えなかったことが要因で、学生生活全般の満足度が高まりきらなかったことが考えられる。本調査からは、興味を満たすことができたり、楽しさを覚えたりして、注力できるものが見つかるまで様々な授業や課外活動に触れていくことで、満足度を高められるかもしれないということがわかった。

学業にも課外活動等にも満足が得られなかった卒業生は、志望度が低かったわけではないが、入学時に大学で教養が身につけられることにあまり影響を受けていなかったなど、大学への期待が薄かったことがうかがえる。また、在学中の学び方も積極的ではなく、学業面やサークル活動への意欲も低く、学修実感も得られていない。卒業後に就いた仕事の内容に大きな違いは見られなかったものの、現在の仕事に対する満足度も低く、就職後の仕事についても大学生活と同様に満足感が得られていなかったことがうかがえる。

学業にも課外活動にも意欲的に取り組み、特に高い満足を得た卒業生は、卒業後 5 年後現在の仕事に対しても満足している。他のグループと現在の仕事の満足度の点で大きく異なるのは、仕事を通じて成長できることについて比較的高く満足しているという点である。このグループの卒業生は、学業と課外活動という学びの質が異なる活動を経験しており、その両方における学びのスタイルを形成してきたことが考えられる。

以上のことから、<u>学生が注力できるものと出会えるまで、大学の様々な側面に触れること</u>ができれば、全学的な満足度の向上に資することができると考えられる。

例えば、

- ・入学した学科の専門を中心としながら、専門内外の様々な領域・テーマに触れられる ようなカリキュラムや授業を展開すること
- ・学生の興味関心に沿った、課外活動の選択肢が広がるような広報を行うこと などが挙げられるだろう。

これらに加えて、注力できるものが見つからず、意欲的になれない学生が困りごとについ

て相談できたり、大学での学び方を身につけたりするための支援を組み込んでいくことで、 学生個人の学びのスタイルを形成し、卒業後の人生でも継続的に学び、仕事や生活、そして 自らの成長に対する満足に資することができると考えられる。